ロンドンからガーナの空港までは、いろいろ乗りついで、結局13時間かかった。わたしたちは、ほったて小屋のようなホテルに荷物を置くと、早速現地のガイドといっしょに町なかをめぐりはじめた。太陽の塔で有名な公園の博物館に収蔵するための工芸品を集めにきたのである。

ザルにまな板、靴や帽子。現地の人にとってはなんの変哲もない日用品が博物館に入ると１００年２００年大切に保存され、衆人の目にふれる、いわゆる宝物と化す。本当の宝は、宝石店や王宮なんかでなく、ふつうに住まう、ふつうの人の家に眠っている。

ジープをとばして田舎の村へ。物見台の下に、見なれない品々を並べた不思議な店があった。

「ごめんください」

「ハーイ、なんだね」

「ここ、何屋さんですか」

わたしは店頭に置かれたはりぼてのベンツ、見上げるようなビール瓶、ブリティッシュエアのわたしたちが乗ってきた飛行機、なぜかイカ、などを見渡しながらたずねた。

「あー、棺桶」

おっさんが答える。

「エッ」

わたしは驚き、もう一度ひとつひとつを検分してみる。

「あんな」

とおっさんは骨みたいにまっしろな歯を見せていった。

「死んだ奴がな。あー、あいつビール好きやったなあ、って奴やったら、ふつうビール瓶に入れたるやろ」

「え、そうなんですか」

「ここではそうなん」

ガーナのおっさんはつづけた。

「ベンツ乗りたかったやろなーとかな。飛行機乗ってどこか行きたかったやろなーとかいろいろあるやん。死んだら身軽やん。乗りたいもん乗せたったらええやないか。ここではそうなんや」

わたしは、

「イカは」

とききました。おっさんは、

「あ、漁師」

と答えた。

よくよく間近で見るとどれもきわめて精巧とはいえないまでも、ていねいに、とてもていねいに、死者の乗りものとして喜んでもらえるよう、技と心をつくして作られたものだとわかった。たずねてみると製作費はバカ安だった。わたしは、博物館のためにまとめ買いする

ことにした。ひとつ分の送料のほうがよほど高い。買い物のあと、なんの気なしに、
「ほかに、どんな変わった棺桶これまでにありましたか」
ときいてみた。おっさんは目をとじて、
「ウーン、ゾウとかねー、ハーレーダヴィッドソンとか、ああ、ビョンセっていうのもあった」
「エ！」
「ビョンセ、めっちゃ好きな奴でな。職人ががんばって、ビョンセかなー、まあビョンセかな、くらいの棺桶つくったよ」
「すごいすね」
「あー、あと、うちのんじゃないけと、川っていうのがあった」
「かわ？動物の」
「ちゃうちゃう、流れてる川」
「へ」
わたしは絶句した。
「そんなんどうやって棺桶にするんですか」
「いやーようしらんけど、この村から北へ90キロくらいいったところに川が曲がりくねったところがあってな、そこの人らはけっこう川の棺桶選ぶらしいで」
わたしは店を離れてからも、ずっとその話を考えていた。翌朝、同行の人たちと別れ、ひとりだけで、その水辺の村をめざすことにした。途中までバスでいき、平底の船にのりかえる。村についたときには陽がくれていた。川べりの小屋があいていたので、荷物をおいてまわりを歩いたが、早寝の村らしく灯火はひとつもともっていなかった。
翌朝早く、川のそばで小舟を洗っている老人にたずねると、ムンベという男を紹介してくれた。棺桶のこと、墓のことをすべてとりしきっている呪術師だという。たずねていくと、小屋のなかからマイケル・ジャクソンの歌声がきこえてきた。アフリカはどこでもけっこうアメリカのR&Bが好まれているのだ。ムンベはジャージ姿だったが、目つきは人間というよりヒョウやライオンに近かった。みやげものを手渡し、事情を説明すると、こともなげに、
「え、ふつうに作るで、川の棺桶」
とムンベはいった。
「シマウマの歯とか、お産直後のカバのつばとか、いろいろ必要なものはそろえなあかんけど、作ること自体はめずらしくないで。今日も夕方からタロンボじいさんの葬式するし。じいさんもやっぱり、川の棺桶に入っていくよ」
「参列することはできないでしょうか」
わたしはすがる気持ちでいってみた。もうこれは、アフリカでよくあるホラ話のたぐいではないとわたしの直観が告げていた。ムンベはわたしの頭からつま先までじっくり見渡したあと、
「べつにかまへんけど、そのままやったらあかんな。とりつかれる」

といった。
「どうしたらいいですか」
「そやな」
ムンベは少し考え、
「ズボンも下着も帽子も、ぜーんぶ裏表反対につけてきてみ。タロンボじいさんくらいの葬式やったら、たぶんそれくらいでも大丈夫やから」
陽がおちてからパンツ、靴下、ランニングまで逆さに着たわたしは、村の集合所に足をむけた。靴は裏返すわけにいかないので左右反対にはいた。
かがり火のまわりに、おそらく村じゅうのひとびとが集まり、葉っぱの上につまれた蒸し料理をつまみながら、ムームーと歌っていた。長方形の変哲のない棺桶がかがり火のそばに置かれていた。近よるわたしを止めるものはいない。のぞきこんでみると、そこにタロンボじいさんが横たわっていた。じいさんの上にサラサラ、サラサラかすかな音をたてて川が流れていた。じいさんの笑みが、川面でゆがむ水流のむこうで、ふにゃふにゃと曲がった。棺桶のなかの川が、どこから流れてきてどこへ流れていくのか、それはわたしにはわからなかった。ただ、いま、ここでは、タロンボじいさんのむくろをサラサラと洗い、そうしてタロンボじいさん自身を夢見た旅先へと自在につれていくのだ。サラサラ、サラサラ、わたしはきびすをかえし川べりの小屋にもどった。
ひと晩じゅう眠ることはできなかったし苦しくもなかったが、目をつむると自分が横たわるこの小屋自体、サラサラ、サラサラ流れていく川の水底に沈みこんでいくのがわかった。それは錯覚ではなかった。朝日がのぼると同時に起きだし、見上げてみると小屋は屋根の先端までびっしょりとぬれていた。まわりの土地はかわききっているのに。ムンベが歩いてきて、
「ヨウ、元気やったか」
といった。
「なんもとりつかれもせず、よかったやないか」
「でも」
と、わたしは屋根をゆびさす。ムンベはうなずき、
「アーそう。ゆうべ、じいさんここに来とったんやな」
といった。
「めずらしい来客好きやったから。あんたのもん、なんかなくなってるで」
調べてみると昨日逆さにはいた靴がなくなっていた。
平底舟が着き、わたしは靴下のままのりこんだ。表裏逆さの服装のせいだったか、行きしなにはみえなかったものが帰りの旅程では見えた。舟がすすむ川の底に、何十何百という老人、若者、女、子どもがあおむけに横たわっていて、黄緑色に輝く陽光に目を細めながら行きすぎる舟にむかって手を振りつづけていたのだ。なつかしそうな笑顔を揺れる水面の底でしずかにうかべながら。　オワリ